

実行委員会特別企画

あたしは痛い 痛くて 痛くて
 たまらないから痛い
 あたしはママン 痛い痛いママン
 ねじれる肉体! のがれられぬ この身がうづく!



大正とは妙な時代である。都市論はびこる今日でも、私には、外に出ると電信柱のつべんに大八車がひっかかっているように思えてならない。これはあの関東大震災の龍巻きで、人が空を飛んでいたという私の母の話が、私の凶という感覚を沸々とさせるためだが、なかなしく、私の母は東京下町の風呂屋の娘であったので、湯舟の熱湯がドンプラコしている上を板を渡して逃げた姿など思うと、私の災厄圏は、戦後の焼跡からすぐ、大正の関東大震災とが繋がってしまうのだ。私の家は下町と言っても、くす屋部落の万年町という所だったので、皆、上野の山をめざして逃げたと言う。庶民の逃げる場所が、戦後の少年の国と言ってもよいあの上野の山であったことは、これまた災難

とユートピアの妙な回路ではないか。ぬれたタオルを頭に巻いて逃げる庶民の前に、あの名高き固定民族がトビロを持って立ちふさがる。それは町内会である。下町の町内会というのは、その会長か副会長に必ず、トビのもん（即ち火消し）がいる。朝鮮人が井戸に毒を投げ込んだというデマが流れた途端に、町内の十字路は、トビのもんにひきいられた町内会の貯金家共が右往左往したと言う。それから何十年もたって、戦後の町内会というのは、子供に腹話術師を呼んで来てやるという風に傷病兵あがりのおじさんになっていたが、それから更に今日、豊かなる都市に現われた町内会は、ひまわり部隊とか、町を明るくする会として復活した。明治以後、大体10年毎に聖戦があり、

劇団状況劇場

小女都市

唐十郎

紅テント和泉祭興行 於一中庭
 5/30・31 夜7時開演 銭300円



10年区切りの幸せという観念を飼育していた市民は、こわされても、又、10年前の幸福観念のパターンを踏襲するという勤勉な性質を持っている。どんなに都市建築に力をいれようとして、かつて、股ぐらに踏みこまれたことのないお皿処女のように、股を閉じる筋肉が、これ又勤勉であるからして、都市の根は、意外な卑弱さを持っている。これは小銭商いか、百姓がカタピラ着たような文化風情であるから、大福喰い競争のように都市の時間は、ばかばかしい。頑くいな胃に石を詰めこんでも喰うという習性によって、時間を迎えられるこの幸せは、かつての10年毎のパターンが、一寸、ゴムの輪をひろげた現象と一つも変わらず、只、60年の頃には、誰でもかかれても国会前のデモに参

加してゆくであろうという「石の語る日」なんて芝居があったけれど、70年を前にして、町内会の勢力を思うと「石の語る日」なんてとてもとても白けてしまう。私の母は又、逃げなければならぬのだろうか。思えば、私たちはいつも逃げていた。そして大震災から上野の山へ、満州の鉄道から、北へ北へと逃げて捕まった。これはいかなる民族であろうか? 固定民族でも、遊行民族でもない。これはねずみ民族である。タイタニック号が氷山にぶつかる2日前に、船倉から姿を消したというあのねずみの群れではなからうか? 寝静まった母の胸にナイフをあてて、トンと押したら、母は血と脱糞にまみれながら、ねずみにインカーネート(肉化)するのではなからうか?—唐十郎—